

Virginia Woolf における生と死

富岡純子

Virginia Woolf は、第二次世界大戦のさなかの1941年3月28日、毎日の習慣となっていたウーズの河堤への散歩に出かけたまま帰らなかった。ウーズ河の流れに身を投じたのである。彼女の死については、いろいろな推測がなされた。戦争の刺激が彼女の敏感な心にとっては耐え難く感じられたのであろうとも言われ、以前経験したことのある神経症の発作への強い恐怖が新作 *Between the Acts* (1941) が出来上がったことからくる虚脱感と相まって、Woolf に自殺という行為をとらせたのであろうとも憶測された。理由はいろいろ考えられるであろうが、ここでは、Woolf が小説の中で描いた「生」と「死」を通して、Woolf 自身の死を考察してみたい。

Woolf の小説の中から死を見つけ出すことはたやすい。ほとんどの作品において、登場人物が死ぬか、或いは、死が暗示されており、死についての記述がないのは、*Night and Day* (1919) と *Between the Acts* (1941) のみにすぎない。Woolf が作品の中で執拗に死を描いたことは、Woolf の体質と環境にも起因しているように思われる。Woolf は、幼少の頃から極度に神経質であったと言われる。そのため、1904年に父が死に、更にその二年後に兄 Thoby が旅行中ギリシアで急逝したことは、Woolf に非常に大きな精神的打撃を与えた。殊に、深い親愛の情を抱いていた兄の突然の死は、Woolf の心に暗い影を落としたと思われる。体質的にも弱かった Woolf には、常に生と隣り合っている死の存在が強く印象づけられたのであろう。更に第二次世界大戦の勃発により、精神的重圧は強まったと思われる。このような作者の不安は、その作品

に反映する。それ故、Woolf の作品には、絶えず死の影がつきまといているのだと言えよう。

Woolf の小説は、大きく、前期、中期、後期の作品に分けられるが、それぞれの中から、一作ずつ、すなわち、前期の *The Voyage Out* (1915)、中期の *Mrs. Dalloway* (1925)、後期の *The Years* (1937) を取り上げて、Woolf の生と死の意識を探ってみたい。

Woolf の処女作 *The Voyage Out* は、英国小説の伝統的手法によって書かれた小説であり、その書き出しもまず場面設定が行なわれ、人物描写は、他の人物の眼を通して多く描かれる。この作品は、世間を知らぬ娘が旅に出て自己に目覚め、恋愛をし、人生の味を知っていくが、熱病にかかり死んでいくというプロセスを描いたものである。登場人物は、女主人公の Rachel をはじめ、Hirst, Hewett という二人の青年も人生に真面目に取り組んでいる。わずかに、Rachel の叔母の Ambrose 夫人が、人生を知った穏やかな態度を示す他は、登場人物は固苦しい迄の真面目な態度を崩すことはない。作中人物はそれぞれ、真に人間を理解することは出来ないという悩みを抱いている。そして、疎外の意識を常に感じているが、他人との完全な理解を願って、それが得られずに苦しむ。Rachel は、Hewett と愛し合うが、依然として二人の間には隔たりのあることを感じ、それが消え去ることを願う。しかし、Rachel は、Hewett とのいさかきの後、招かれたお茶の始まるまでの時間を、ホテルの広間に坐って待つ間、人々が広間を通り抜けて行く姿を眺め、人生のある姿を悟る。Rachel は、自分がある安らぎと静謐の状態に到達したことを感じる。そして、このような状態に導いたのは愛なのだと思う。すなわち、Rachel は、愛を知ったことにより、人間が孤独な、常に独立した存在であることに気づいたのであり、人間が独立した存在であればこそ、このような純粹な瞬間を得ることができるのだとしているのである。Rachel は、このような認識を得るが、突然、熱病にかかって死んでしまうのである。

Rachel の死は、あまりにも唐突にやってくる。このような Rachel の

突然の死は一体、何を意味するのであろうか？この物語において Rachel が死ななければならぬ必然性はどこにもない。かといって、死が残酷で不可抗力なものとして描かれているのでもない。従来の考え方而言えば、明らかに悲劇と言えるこのような主人公の死は、この作品においては、悲劇として感じられない。作者の意図は、悲劇を書くことではなかった。なぜなら、Rachel の死は、静かな、美しいものとして描かれているのであるから。ではなぜ Woolf は、Rachel の死を描いたのか？私には、Woolf が、自分の抱いている死についての独特な考えを書き表わしたかったからではないかと思われるのである。Woolf は、この作品において、死について独特な考え方を示している。Rachel の臨終と、それに続く描写は、この作品の中でも特に精彩を放っている。ここにおいて、死の苦痛は強調されず、ある均衡を保った静かな調和として描かれる。

So much the better — this was death. It was nothing; it was to cease to breathe. It was happiness, it was perfect happiness. They had now what they had always wanted to have, the union which had been impossible while they lived. Unconscious whether he thought the words or spoke them aloud, he said, “No two people have ever been so happy as we have been. No one has ever loved as we have loved.” (*The Voyage Out*, p. 431)⁽¹⁾

Hewett は、Rachel の死に臨んで、生きている間には不可能であったある結合を持つことができたことを感じる。死とは完全な平和であり、幸福でさえあると表現されている。このように、死は、奇妙なまでに静かな美しいものとして描かれているのである。そして、私は、この描写の背後に、Hewett と同様に、魅せられたように死の意識に浸っている作者の姿が感じられるのである。Woolf は、確かに、このような死を描きたいと欲したのである。たとえ、それを描くことで、ストーリーの面で

不自然さが生じようとも。

そして、ここで生じた不自然さは、逆に言い換えるならば、小説の形式の不適確さによるのだとも言えるであろう。このような、ストーリーの重んじられる従来の小説の形式を取るのなら、事件は作品全体に対して、ある意味を持っていなければならないのであり、納得のいく必然性が存在するか、又は、それが素直に受け入れられるような下地が準備されなければならないのである。「死」という問題自体について扱いたいのであるなら、事柄が時の順序に従って起こり、死が物語の結末となるような従来の小説の書き方では不適當なのである。この問題は、中期以降の作品において解決される。すなわち、Woolf は、実験を重ねた末、独自の手法を見出すことにより、「死」の意識と言うような、人間の内面の意識を描くのに、最も適した基盤を得ることになるのである。

Mrs. Dalloway は、このような基盤の上に描かれている。その基盤とはいわゆる「意識の流れ」(stream of consciousness) の手法である。ここでは、初期の作品に見られる伝統的手法は捨て去られ、ひたすら人物の意識の追求がなされているのである。*Mrs. Dalloway* は、Clarissa Dalloway が、ロンドンの六月の朝に、その夜の夜会のために花を買いに出かけるところから始まる。そして、成功を収めた夜会が終ろうとする頃、Clarissa が昔の恋人の Peter Walsh に近づいて行くところでこの物語は終る。登場人物は、時間と空間によって、縦横に微妙につながりあわれ、種々の小事件が展開される。人物の姿は、当人とそのまわりの人々の意識の中で次第にはっきりと浮かびあがってくる。

Mrs. Dalloway の女主人公 Clarissa Dalloway は、*The Voyage Out* の登場人物のように時折、孤独にとらわれるが、Rachel や Hewett のような強い悩みを抱いていない。Clarissa は、孤独を貴重な、尊重すべきものと考えている。人間の孤独についての Clarissa の意識は夜会を愛することにつながる。Clarissa は、夜会に人々を集めることで人々すなわち仲間の囚われ人の苦痛を和らげようとしているのである。Clarissa は、あくまでも人々に奉仕しようとしているのであり、自

ら孤独に苦悩する夫人の姿はない。Clarissa は既に孤独から脱しきっているのであり、孤独に対抗して生き抜こうという意欲を内に秘めているのである。

Clarissa は、人生を激しく愛し、人生の一瞬一瞬を生きることに大きな喜びを感じている。しかし、生を愛する者は死を恐れる。殊に、大病を患った後の彼女は、若さの喪失を感じ、死の不安は時折彼女に訪れる。生を死に導くものは時間である。それ故に、Clarissa は、時間を恐れる。自分が年を取ったことを感じた時、彼女の受ける衝撃は大きい。今の瞬間の真直中に飛び込んでその瞬間を釘づけにしたいとさえ願う。この激しい欲求は、死を恐れるが故のものである。しかし、その夜の夜会の最中、Bradshaw 夫人から、ある青年の自殺を告げられた Clarissa は、その青年の死に深い共感を覚える。

その青年とはすなわち、Septimus Warren Smith のことであり、Septimus は、この小説において、Clarissa に次いで大きな位置を占めている人物である。Septimus は、大戦で神経症に冒され、そのための幻覚は次第にひどくなり、遂に下宿の窓から投身自殺をするに至るのである。Woolf の最初の意図では、Septimus は存在せず、Clarissa 自身が死ぬという計画であった。後になって Septimus という人物を作り出したのである。では、なぜ Woolf は Septimus を登場させたのであろうか？この理由として、狂気の世界を描こうとしたこと、社会批判をしようとしたこと等が考えられるが、私には、最も大きな理由として Woolf が生のささやかな勝利を描きたいと欲したためではないかと思われるのである。女主人公の Clarissa が死ぬのと、Clarissa の影法師である Septimus が死ぬのとでは、意味が違ってくると思うのである。

Clarissa は、前に述べたように夜会の途中で Septimus の死を告げられ、その死に深い共感を覚える。日常生活の中にある貴重なものを青年は守ったのだと感じる。自分が惰性的な生活の中で失っていったものを Septimus が保存してくれたように感じるのである。そして、彼女は、Septimus が死によって大切なものを守り得たことを羨む。ここにお

いて、彼女の死への恐怖は薄れている。*The Voyage Out* において見られた「死は完全な調和」という考え方と共通するものがここにも見られる。死への憧れ、死がすべてを擁護するといった考え方が感じられる。しかし、そう感じはしても Clarissa は自殺しない。

Septimus の死は、彼の過去を描くことにより、充分納得のいくように描かれている。Septimus は登場の最初から死を感じさせる。Septimus が自殺すると以前から口走っていることは幾度も述べられ、結末を暗示している。Septimus は Clarissa が感じたように Bradshaw のような人間が魂を威圧するのを嫌い、魂の純潔を守るため自殺した。しかし、Clarissa が感じたような死への憧れを抱き、平和な死を真に望んでいたであろうか？ Septimus が自殺する直前の描写は、この疑問を抱かせる。

But he would wait till the very last moment. He did not want to die. Life was good. The sun hot. Only human beings?

(Mrs. Dalloway,⁽⁴⁾ p. 214)

この文章は、ひどく心にかかる。Septimus は死を間際にして死にたくないと感じた。Clarissa のように Septimus は人生を愛していた。しかし、彼にとって人間は邪悪なものであった。Bradshaw のような人間のために、Septimus にとって人生は堪え難いものであった。Septimus は、真の魂といったものを守るために自殺したとも言えるし、邪悪な人間に打ち勝つことができなかつたとも言えるのではないだろうか。Septimus の場合、死が勝ったのである。

一方、Clarissa は、夜会が終りに近づいた頃、窓から真向いの家の老婦人を眺めて、人生というものの姿に突き当たる。

It was fascinating, with people still laughing and shouting in the drawing-room, to watch that old woman, quite quietly, going to bed alone. She pulled the blind now. The clock began

striking. The young man had killed himself; but she did not pity him; with the clock striking the hour, one, two, three, she did not pity him, with all this going on. There! the old lady had put out her light! the whole house was dark now with this going on, she repeated, and the words came to her, Fear no more the heat of the sun. She must go back to them. (Ibid., p. 267)

Clarissa は、老婦人がひとり、寢床につこうとしている姿を見て、静かに人生が続いていく事実を知らされて、深い慰めを感じる。「人々の所へ戻らなくては」という気持は、たとえ虚偽の多い人生であろうと、その中で生きようとする夫人の決意を示している。この決意は、決意と呼ぶにはあまりにも弱々しい。だが結局、Woolf は、Septimus を Clarissa の代りに自殺させることで、ささやかで、弱々しくはあるが、生の勝利を描いたのである。

・ *Mrs. Dalloway* において、「意識の流れ」の手法の使用に成功を収めた Woolf は、*To the Lighthouse* (1927), *The Waves* (1931) において、その手法を更に強く押し進めた。*The Waves* は、彼女の手法が限界に到達した作品とすることができる。そして、Woolf は次の作品 *The Years* において、手法上の大きな転換を行なう。これに続く最後の作品である *Between the Acts* は、この方法を更に進めた作品といえる。これら二つの後期の小説には、従来の外面描写の手法が多く取り入れられ、ここに至って Woolf は内面的ヴィジョンの追求に背を向け、外面的なものに眼を向け始めたのである。このような変貌の理由は、日記によってある程度知ることができる。それによれば、Woolf は、*The Years* において内と外の結合をめざしたのであり⁽⁵⁾、このため、彼女の新しい手法と伝統的小説の手法の融合が行なわれたのである。そして、1932年11月2日の日記によって、Woolf が自己のヴィジョンに反抗するため、この

ような転換を行なったのだということが窺われる。 *The Waves* において内面世界の極限を描いてしまった Woolf は、もう内面を掘り下げていくことはできなかった。だが、次の段階に進まなければならない。そのためには、自己のヴィジョンが自分を誘おうともあえて、それに反抗しなければならなかったのである。

The Years で描かれる世界は、狭い、限られた世界で、Pargiter 夫人の死や、大戦以外には、事件らしいものは、ほとんど起らない。物語は Pargiter 家を中心に展開する。Pargiter 家の Eleanor, Edward, Morris, Milly, Delia, Martin, Rose の七人の子供達と、彼らの従妹の Maggie と Sara, そして、再従妹 Kitty の生活が主要な筋を織りなしている。Pargiter 夫人の死が最初に描かれ、続いて Abercorn Terrace の家の崩壊が描かれる。家は貸家となり、七人の子供達と、従妹たちの姿が次々に描かれ、やがて戦争が始まり、不安に満ちた時が過ぎ、終戦を迎え、現代に至るのである。

まず我々がぶつかるのは、Pargiter 夫人の死の場面である。それに先立って、死期のせまった母の冷たい傍観者としての Delia の姿が描かれる。Delia は拳を握りしめて母の名を叫ぶ父の姿に虚偽を見出し、まるで芝居の場面のようなと思う。そして、平然と、窓ガラスをつたう雨の雫を見つめるのである。死という事実を前にして、あまりにも冷ややかな父と娘の姿は、今までの作品中の人物には見られなかったものである。*The Voyage Out* の Hewett にとっても *Mrs. Dalloway* の Clarissa にとっても、死は重大な意味を持っていた。死は神聖とも言えるものだった。それに対して、Delia のこのあまりにも冷静な態度は、奇異なものに感じられる。だが、この Delia も、母の埋葬の場面にあっては、死に強い衝撃を受ける。

She stared down into the grave. There lay her mother; in that coffin — the woman she had loved and hated so. Her eyes dazzled. She was afraid that she might faint; but she must

look; she must feel; it was the last chance that was left her. Earth dropped on the coffin; three pebbles fell on the hard shiny surface; and as they dropped she was possessed by a sense of something everlasting; of life mixing with death, of death becoming life. For as she looked she heard the sharrrows chirp quicker and quicker; she heard wheels in the distance sound louder and louder; life came closer and closer ……

(*The Years*, p.92)⁽⁷⁾

埋葬に立会って初めて Delia は、死というものに対して心を動かされる。死に魅せられたかのように、生と死の結合の意識に心を奪われている Delia の姿が描かれる。ここに至って、Delia も、Hewett, Clarissa と同じように、神聖で恍惚たる死の意識にとらえられるのである。だが、Delia の場合、その意識は自然に心の中に湧き起ってくるものではなかった。彼女は、「見なければならぬ。感じなければならぬ。これが残された唯一の機会なのだ。」と自分に言い聞かさなければならなかった。そしてまた、生と死の結合の意識に心を奪われはしても、祈りの言葉に虚偽を感じたとたん、その感情は打ち砕かれてしまうのである。そして、一たび感動が消え去ってしまうと、以前の冷静な心が立ち戻り、またもや父の姿に誇張を見出すのである。Delia は、今までの作中人物のように、死の意識のただ中に入っていくことができないのである。死の意識に深く立ち入っていく代りに、Delia は、祈りの言葉をきっかけに、現実に戻ってしまうのである。ここにも、Woolf が *The Years* でめざした姿勢が感じられる。死の意識に強くひかれながらも、それを描くことを自分に許さず、あえて、それに反抗している Woolf の姿が思い浮かべられるのである。

The Years の登場人物は、さまざまな考えを抱き、彼らが孤独に悩む姿もかなりの部分にわたり描かれるが、Pargiter 家の多くの人々の中で最も印象的なのは Eleanor である。「現代」の章で Eleanor が人生につ

いて考え、自分が現在、生のただ中にあるという意識を持つことで大きな幸福感を味わう様子が描かれ、これは、夜会での最も重要な部分となっている。Eleanor は、夜会の最中、自分は今まで人生をつかんだことはないと思う。自分の人生を振り返ってみても、思い出されるのは、さまざまの人生の断片でしかない。彼女にとって、人生とは無数の事柄の積み重ねである。重要なのは、ただ現在の瞬間のみである。Eleanor は、うたた寝からさめた時、異常な幸福感を味わう。Eleanor は、皆が未来を控えていて、若々しいような気がする。人生が自分達の行手に広々と開けているという思いは、Eleanor を有頂天にさせる。そして自分の人生は奇跡だったのだと叫ぶ。だが、このような Eleanor の感情の迸りは、なんと唐突であろうか。あまりにも紛れのない生の歓喜が描かれていることが、かえって不自然さを感じさせる。だが、このように幸福感に酔う Eleanor に対し、Eleanor の考えのことごとくを懐疑を抱く姪の Peggy の姿が、まるで Eleanor の紛れもない歓喜にさす影のように描かれる。

Peggy は、Eleanor に一緒に楽しみなさいと言われても、この瞬間を楽しむということができようかと心に尋ねる。また Eleanor は、この世の中に生きている人間と一緒にいて幸福なのだと言う。この言葉も Peggy の心の中では虚ろに響く。悲惨に満ちたこの世の中に生きていて Eleanor のように幸福になれるとは、Peggy には考えられない。このような悲観的で絶望的な Peggy の懐疑は、Eleanor の純粋な幸福感と明らかな対照をなしている。Woolf は何を意図してこのような Peggy の姿を描いたのか。この場合、Eleanor のヴィジョンを強く打ち出すために Peggy の懐疑を描いたのだと考えられる。というのは、Peggy のヴィジョンが、Eleanor のヴィジョンに近づいていくような様子が描かれるからである。自分だけは楽しむことはできないと考えていた Peggy であるが、Renny に、彼の描いたこっけいな絵を見せられると、皆と共に笑い出す。そして、笑うことによりある認識を得る。笑うことにより、真実の笑い、真実の幸福が存在する状態を Peggy は感じるのである。そして、この世界は完全で自由だったのだと感じる。このように、最初は

懐疑を抱きながらも、結局 Eleanor のヴィジョンに共通するような認識に到達する Peggy の姿を描くことで、Woolf は Eleanor のヴィジョンを強調したのである。Woolf が訴えたかったのは、Eleanor のヴィジョンであろう。しかし、私には、対照として持ち出されたものにすぎないと思われる Peggy の懐疑の方が、わざとらしくさえ思われる Eleanor の認識よりも真実味を持っているように感じられるのである。また笑うことで世界が完全で自由なものだと悟る Peggy の姿にも、なにか不自然なものが感じられる。これまで深刻な懐疑に悩んでいた Peggy にしては、この認識は唐突であり、作者の、作品構成上の必要性に基づく描写という感じを受ける。ここに Woolf の願望が感じられる。Woolf は、作中人物が幸福で、人生を楽しんでいることを欲したのである。Eleanor が幸福感に浸る姿が繰り返し、強調されていることは、それだけ Woolf の願望の強さを示しているように思われる。そして、Eleanor のヴィジョンをより強調するために描いた Peggy の考えにおいて、かえって Woolf の真情が露呈してしまっているように感じられるのである。

ところで、Eleanor にとって、生きている人達と一緒にいることが幸福であった。すなわち、Eleanor は生を愛した。生とは、その結末に必ず死を持つものである。Clarissa は、生を愛するが故に死を恐れたが、Eleanor にとって、死はどのようなものであったのだろうか。Eleanor の心の中には、死の意識はほとんど現われないように描かれている。しかし、老いることは、死に近づくことに他ならない。意識にのぼることはなくても、年老いた Eleanor の存在は、それだけで死の間近なことを感じさせる。夜会の終りに、Eleanor は、第二の人生が今ここにあるにちがいないと思う。自分は人生をまだ理解し始めたばかりだと感じ、現在の瞬間を完全な姿でとらえたいと思う。そして、次のような記述が続く。

“Edward,” she began, trying to attract his attention. But he was not listening to her; he was telling North some old college

story. It's useless, she thought, opening her hands. It must drop. It must fall. And then? she thought. For her too there would be the endless night; the endless dark. She looked ahead of her as though she saw opening in front of her a very long dark tunnel. But, thinking of the dark, something baffled her; in fact it was growing light. The blind were white.

(Ibid., p. 462)

ここにおいて初めて、Eleanor の心のかげりを認めることができる。あんなにも、生き生きと、幸福感に満ちていた Eleanor も、自分にも果てしない闇がくるのだらうということを感じる。しかし、闇のことを思いしてみるが、何か彼女を試みを挫折させる。「事実、あたりは明るみ始めていた。日よけが白んできた。」という言葉で、この問題は打ち切られている。Eleanor は、果てしない闇について考えることはできなかった。闇とは、Eleanor にとって死を意味すると考えられる。そしてまた、闇に立ち向かっていくことは、Woolf の内的ヴィジョンの探究なのだと言えるであろう。しかし、ここでは、闇について考えることはなされない。Woolf は、もなや闇について考えたくはなかったのである。このような空虚な無気力さに対して、小説の終りの文章は、穏やかで明るい。この小説は、次のような文章で終わっている。

The sun had risen, and the sky above the houses wore an air of extraordinary beauty, simplicity and peace.

(Ibid., p. 469)

この文章には、The Waves を書いた後の Woolf の求めていた姿勢が感じられる。登る朝日は闇からのがれるための、すなわち、自己のヴィジョンからのがれるための救いであったのである。

Woolf は、*The Years* を書いた後、最後の作品となる *Between the Acts* を執筆する。*Between the Acts* では、*The Years* におけると同

様、自己のヴィジョンの追求は押し進められていない。時代の危機感と、人間の心理的葛藤は、ありありと描き出されているが、「孤独」「人生」「死」といったテーマは、ほとんど姿を見せない。*The Years* において、Woolf は、自己のヴィジョンからの逃避を試み、*Between the Acts* においてもその態度を崩さなかったとすることができる。だが、Woolf は本当に自己のヴィジョンから逃避し得たであろうか。この疑問を抱いた我々が最後に行き着くのは、冒頭に述べた Woolf の自殺という事実である。結局 Woolf は、逃避を試みながらも死というものから完全に逃れることはできなかったのだと言えるであろう。

今まで、ここで述べてきた Woolf の小説中の登場人物達の死の意識を辿っていくことで、Woolf 自身が自殺に至るまでの道程を知ることができるような気がする。そこには、Woolf 自身の死への共感と、死への反抗の跡が印しるされているように思われる。

The Voyage Out において、Woolf は死への共感を率直に書き表わした。死は少しも恐るべきものではなく、完全な平和として描かれていた。この頃の Woolf には、自分自身を誘う死の影はほとんどなかったからこそ、正面切って、Rachel の死を描くことができたのであろう。*Mrs. Dalloway* において、Woolf は Clarissa が Septimus の死に深い共感を覚える姿を描きはしたが、結局、Clarissa の代りに Septimus を死なせることで生の勝利を描いた。ここに、Clarissa を死なせることのできなかった Woolf の弱さが認められる。時として、自殺を思いそうになる自分を励ますためにも、Clarissa を生き残らせねばならなかったのである。*The Years* において、Woolf は死を追求することはしなかった。このことは、かえって、Woolf に死の誘惑が強く働いていたことを示すものではないだろうか。作品において、死を無視することは、Woolf にとって、自分を誘う死への精一杯の反抗であったのだと言えないだろうか。

また、*Mrs. Dalloway* から *The Years* へと、作品が進むに従い、死への追求がなされなくなっていったのに対し、「生の充実」の描かれる度

合いは反対に増じていったことが認められる。*The Voyage Out* において、登場人物が人生を楽しんでいる姿は、別段強調されていなかった。*Mrs. Dalloway* においては、Clarissa の人生への激しい執着と、生を享受する態度が描かれているのを見ることができた。そして、*The Years* において、Eleanor は、Clarissa 以上に紛れのない生の歓喜を味わう。このような登場人物の姿は、もはや純粋に人生を楽しむことのできない自分自身を励ます意味で書かれたように思えるのである。結局、なんとかして生の喜びを見い出そうとするこのような努力は、死への抵抗と同一のものなのである。だが、このような死への抵抗にもかかわらず、Woolf は遂には、死の誘いに屈するのである。生きている間、苦しみ、悩みぬいた彼女にとって、死は魂の慰安所とも言えるものであったにちがいない。Woolf は *The Voyage Out* に描いたような完全な平和を求めて、死を選んだのであろう。Woolf が日記に記した “life : of being capable of dying⁽⁸⁾” という言葉が意味深いものとして思い出される。Woolf は、死が自己の最後の慰安場所となることを知っていた。常に死と隣り合った生を生きてきた Woolf にとって、「人生とは死が可能な存在」に他ならなかったのである。

〔註〕

- (1) London : The Hogarth Press, 1965.
- (2) *A Writer's Diary* (London : The Hogarth Press, 1953), p. 52.
- (3) *Ibid.*, p. 57.
- (4) (英米文学叢書) 研究社, 1969.
- (5) *A Writer's Diary*, p. 237.
- (6) *Ibid.*, p. 189.
- (7) London : The Hogarth Press, 1965.
- (8) *A Writer's Diary*, p. 184.